

みやぎ・シー・メール

創刊号

平成5年11月

発行：宮城県水産研究開発センター

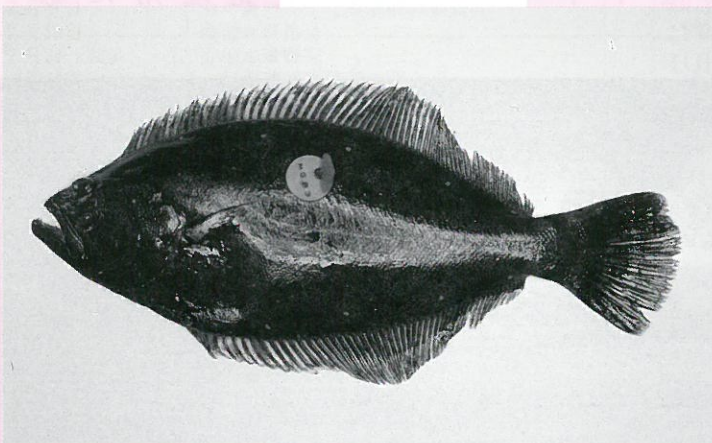
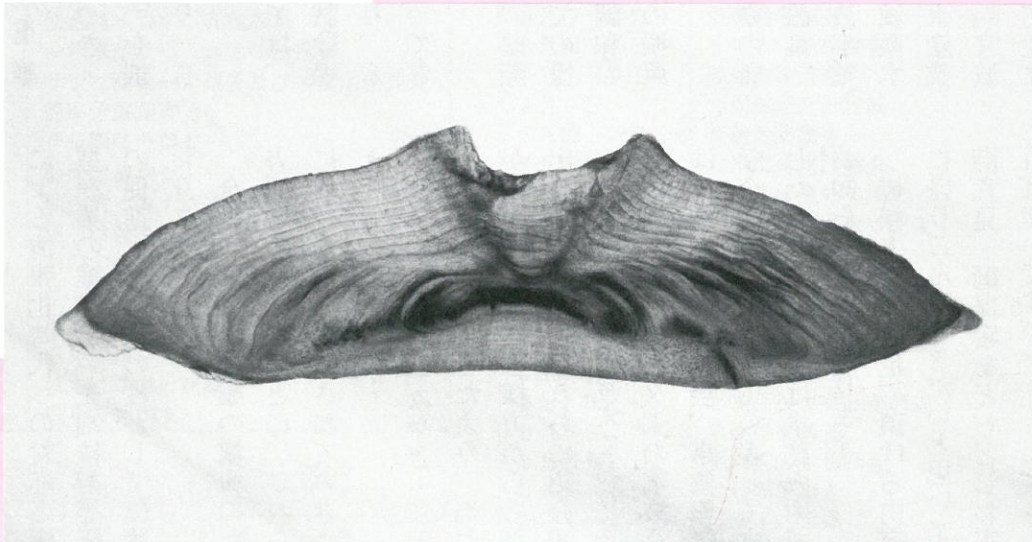
〒986-21

宮城県石巻市渡波字袖ノ浜97の6

☎ 0225-24-0138

FAX 0225-97-3444

ヒラメの耳石切断面



ヒラメ成魚

目次

発刊にあたって	2
各部各課・科紹介	3～7
平成5年度事業一覧	8
主要行事・組織	9
トピックス	10

宮城県水産研究開発センター

Miyagi Prefecture Fisheries Research and Development Center

「発刊にあたって」

宮城県水産研究開発センター

所長 丹野 重雄



この度、「みやぎ・シー・メール」を創刊するにあたり一言

御挨拶を申しあげます。

宮城県水産研究開発センターでは、明治三十二年四月に宮城県水産試験場として創設以来九十余年にわたり、水産業の基礎研究と技術開発を行ってきております。

水産業にありましては、近年、国際的な二百海里体制の定着、公海での操業規制強化のなかで、環境との調和のとれた沿岸及び沖合・遠洋漁業の振興の重要性が増大しています。

このようななかで、高度な技術の研究開発と普及を担う中核施設が設備・機能を充実強化して、石巻市渡波字袖ノ浜の地に新たに建設され、宮城県水産試験場は二十一世紀の新たな水産業の展開に向け、平成五年四月に「宮城県水産研究開発センター」として生ま

れかわりました。

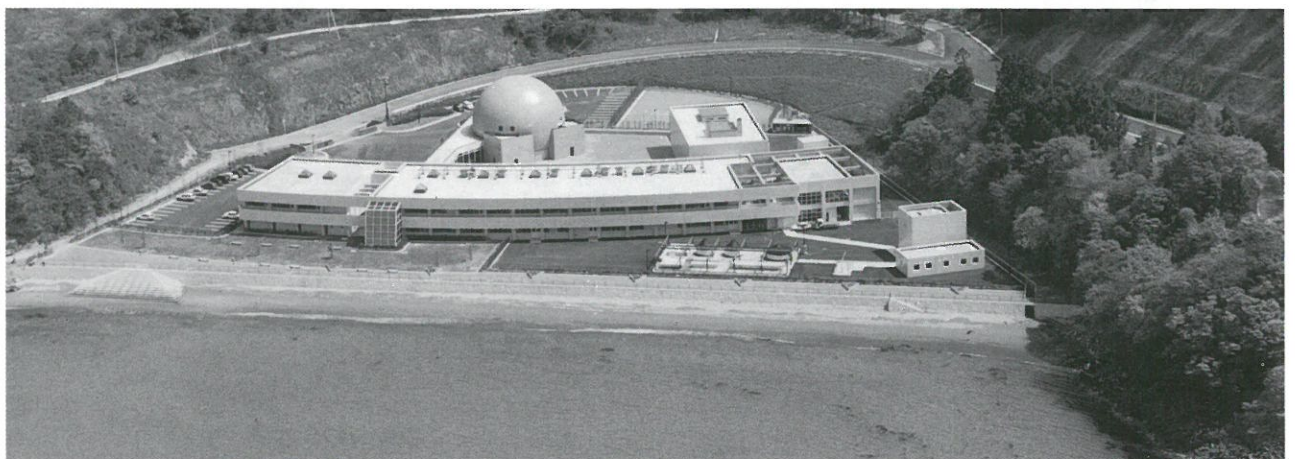
当センターの方針は、「水産研究の総合調整」、「誰もが利用できる開かれたセンター」、「情報処理システムの活用による情報化時代への対応と資源管理型漁業の推進」、「先端技術等研究開発の促進」を四本の柱として位置づけております。

今後、本県水産業の振興のため、各方面との協調のもとに、これらの実現に向けて努力をかさねていきたいと考えております。

この度創刊した「みやぎ・シー・メール」は、海からのたより、当センターからのたより、皆様方からのたよりを出来るだけ新鮮なうちに紹介する場にしてまいりたいと考えております。

これまで当センターの事業及び成果は、研究成果発表会、事業報告書及び学会誌などを通じて公表してまいりましたが、これからは本誌の中でも随時お知らせしてまいります。

皆様方に御満足の頂ける内容を本誌に盛りこんでいきたいと思っておりますので、御意見・御提案をどしどしお寄せ頂ければ幸いです。

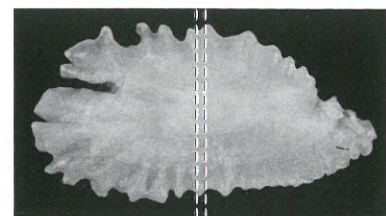


〔表紙：説明〕

魚の成長や産卵、生残りなどを研究する上で年齢を正確に知ることはとても大切です。

体の一部を使って調べますが、ヒラメは頭の中の耳石に現れる縞模様を数えることによって、年齢が分かります。

県内で漁獲されているヒラメは、1才魚が一番多くなっていますが、これまでの調査では19才のものが最高齢でした。



◀ ヒラメの耳石

→ 切断面

各部各課・科紹介

(総務課)

「見学コース紹介」

石巻市渡波。牡鹿方面に万石橋を渡るとすぐ右折して約二キロ。車で五分ほど進むと、青い海と緑の森の中から一見「森と海と人の宇宙」を連想させるユニークな形の建物が見えてきます。パープル色のドーム型のホールには、四色で飾った照明ボールが十二本。見て、触れて、楽しみながら水産業を知って頂くためのビデオやパソコン・クイズQ&Aと大型展示水槽などのコーナーを設けております。

ホールと研究棟を結ぶ通路は、海や水産業のパネルを展示し、楽しみながら学べるギャラリー空間となっております。

建物面積は、約五千七百平方メートル敷地は、約二・四畝あります。

海を一望する研究棟の前面には、芝生が張られ木のベンチが数多く置かれてあり、延長約二百メートルのプロムナードには県の花、鳥、

獣、木などの絵タイルがはめこまれ、ちょっとした海浜公園として県民の皆様にご利用されております。



プロムナード

開所以来の見学者数は、十月末現在で延べ七千人を越え、水産関係者は勿論、学校や町内会・婦人会など様々な団体視察者・家族・小グループなどの多くの方々、遠くは北海道や九州から、更には諸外国からの来訪もあります。

今後県民の皆様が水産について楽しみながら学べる環境づくりを努めたいものです。

(研修部)

これまでは、水産業に関する技術と担い手の育成・確保のための研修・講習会の開催や広報用パンフレットの作成など水産業や試験研究の情報と技術の普及を主に行ってきました。



地引き網体験

これからは、これに加え、一般県民に向けても、海や海に住む生物、宮城の水産業への関心と理解を深めて頂きたいものと、海の教

室や海洋講座などのイベントを企画してまいります。

海の教室親子体験学習は、九月十一日、小学校五・六年生を対象に、地引き網、プランクトン採集等の体験学習と魚・プランクトンの種類や名前、仕組みを調べる等の研究体験を四十家族、百九名が参加して行われました。

海洋講座は、一般県民の皆様にも、宮城の水産業と水産試験研究機関の役割や仕組み等を紹介するとともに、魚の栄養価・流通・利用・加工の仕方や海の生物・海洋の働き等についての知識を広く、正しく、理解してもらうために、漁具作りや漁労体験等も企画して行きたいと思っております。

また、県内五つの水産試験研究機関の連絡協議会、研究成果発表会を開催し、試験研究課題や事業の調整、成果の広報・普及等により、効率的に試験研究が行えるよう努めてまいります。これらを研修部長とスタッフ二名で担当しております。

海洋資源部

(海洋情報科)

イワシが減り続けています。全国で年間四百万トンも獲れていたのが、今年は二百万トン以下になりそうです。二百万トンという重さ、例えば良くありませんが体重六十キロの人間三千三百万人にあたります。国では「マイワシ資源緊急調査」を開始しました。国と県の水産試験研究機関が共同でイワシが何故減り始めたかを調べています。しかし、地図で眺めるより実際の海は果てしなく広く、そして途方もなく深いのです。ここで限られた調査船と調査員がイワシの姿を追いかけています。

海は生命の源と言われています。その大切な海を知るための努力は昔から続けられています。しかし海の情報は多いようで少なく、分からないことが山ほどあります。確かに情報を得るための技術の進歩は目を見張るものがあります。水深一千メートルの水温を



調査指導船「新大東丸」

知るための時間は一昔前の比ではありません。しかし、それを一笑に付す程に海のスケールは大きいのです。

海に対し謙虚に問いかけ、返されたメッセージを科学のことばに通訳し、それを誰にも分かりやすく伝えること、それが当科の努めと考えています。

(新大東丸)

丸山船長以下八名の屈強な男達。チームワークは抜群で、若干名を除いては、みんな無口で一見怖そうですが、実は気の優しい人ばかりです。

二百海里(三百七十km)時代という言葉は誰もが知っている言葉ですが、新大東丸は、宮城県沖合二百海里を少し越えるところまで



ブリッジ

が調査海域です。減り続けるイワシの動きを調べるには最低そこまでする必要があります。山と同様、海の気候も変わりやすく、調査の準備は先ず気候の状況を調べることから始まります。二百海里まで出ると、そこで目に入るものは広大な海と水平線だけ、晴天の穏やかな日にイルカの群れに出会ったりしたらもう最高の気分です。しかし、低気圧や台風の

接近している時などは、海はまさに地獄と化します。船酔いは逃げ場がありません。あの重病人の状態は実際に経験してみるに限りません。そんな時でも、わが新大東丸のクルー達は黙々と仕事をこなして行きます。ここから敬意を表したくなります。

「船の人達は船酔いしないのか?」「我々だって酔う。カッコ悪いから酔ってないふりするだけ。」本当に船の仕事は大変です。

(紹介 船に弱い調査員)

(資源科)

春、金華山のぶなが萌え出る頃、金華山海域で、ベールリング海から南下してくる栄養塩豊かな親潮とフィリピン海域から北上してくる暖かな黒潮がぶつかり合う。潮境付近では冷水が暖められ、大量のプランクトンが発生します。沿岸で冬に生まれ、その時期を待っていたイカナゴやタラ類等多くの稚魚達が急激に大きく育っていきます。それらを食するためヒラメ、スズキ、サケ・マス、ウミネコ等たくさんさんの魚類や海鳥が集まります。南からもイワシ類、マサバ、スルメイカ、ブリなど大量の回遊魚やクジラの仲間がやってきます。桜の開花や養蜂の前線北上のように、多くの魚群は潮境の北上とともに餌を求めて北の海へ移動します。それぞれ、餌をたくさん捕れる時期と場所をコンピュータで計算しているように、自分達の繁殖

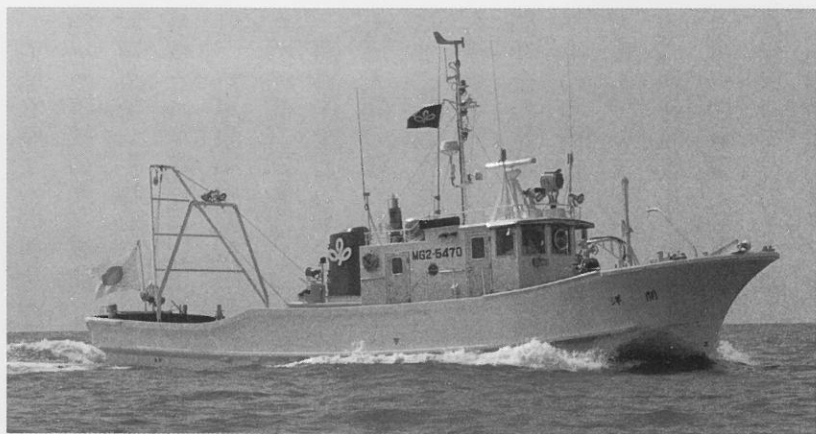


魚体精密測定

期と回遊経路を設定しています。秋、金華山のぶなが黄金色に変わる頃、北の海を広く回遊していた魚群が金華山海域にもどってきます。サンマやスルメイカは夜間ランプを灯して漁獲しますので、秋の海は一日中賑やかです。「世界有数の漁場金華山海域」そこで育つ豊かな資源を、最も効率良く利用していくための方策を科学的に明らかにするのが私達の任務です。

(開洋)

「船ってのは自動車の様にエンジンにかけてすぐ出発というわけにはいかん。準備することが多いから、集合時間を守ってもらわんと。」とかく時間にルーズな我々を厳しくしかってくれるのが開洋の佐藤船長。そんな我々を微笑ん



調査船「開洋」

で迎えてくれるのが斎藤、平塚のご兩人。

宮城県は全国的にも養殖業の盛んなところで、海岸線に沿って北から南までフルに海を利用していきます。例えば、カキの養殖。昨年は種ガキが不作で大変な年でした。今年は何とかしよう。開洋は仙台湾十一号、海洋観測点十七点を走り回り、種ガキと海の状況を調べました。結果はOK。

十六トンの調査船を三人で切り盛りするのは大変なこと。できるだけ我々調査員も同乗して一緒に作業をします。そして、そんな時が船の人達との限られた会話の時でもあります。仙台湾の透明度はせいぜい二〜五メートル程度、牡鹿半島をかわして北へ向かうとそれは十〜二十メートルにもなりません。

海を利用するだけでなく、孫子の代まで守って行くこと。それが今求められています。開洋の役割は益々大きくなりそうです

(紹介 時間にルーズな調査員)

環境養殖部

(環境調査科)

宮城県沿岸水域の水質・底質などを調べ、環境と有用水産生物との関わり方を調査研究するところである。

調査海域は、北は志津川湾から、雄勝湾・女川湾・万石浦・石巻湾・松島湾・仙台湾の福島県境までです。その中の一部

については、定期的に調査し、その結果を関係機関に通報しています。調査項目は、各層ごとの水温・塩分・pH・溶存酸素量・COD・栄養塩類などを中心に各漁場特性に応じて行っていますし、他に底質等も加わります。これらは漁場の環境要因としてどれも重要なものなのです。

例えば、女川湾などのギンザケ



漁場環境調査

養殖漁場では、夏季の酸素欠乏によるへい死が心配されますので定期的に溶存酸素量及び底質を調べたり、貝殻散布等による漁場環境

の維持保全のための調査・試験を行っています。

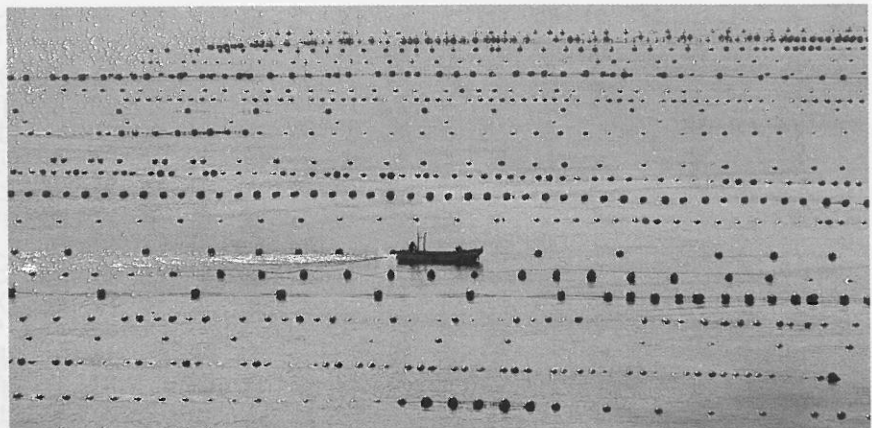
また、女川原子力発電所からの温排水のモニタリングのため、周辺海域で環境面及び生物面の調査を行ったり、今年問題となった貝毒について、貝類の毒化の監視、原因プランクトンの発生状況調査や毒化の原因究明と予察などの仕事も行っています。

(環境保全科)

地域水産業の振興を図るため、漁場改善技術開発試験、漁場保全対策事業（生物モニタリング調査事業）や生物活用漁場保全調査等、沿岸漁場の環境の維持保全のための調査試験を行う科です。

漁場保全というのは、一言でいえば人間の様々な活動によって海に加えられた様々のインパクトから漁場を守ることです。最近の人間社会の急速な発展に伴うインパクトの多様化は、試験研究分野にも及んでいます。例えば、最近話題の地球温暖化といった問題も、漁業への影響という観点からは、漁場保全の分野とされています。

漁場環境の維持保全を目指すには、漁場環境の監視、漁場更生技術開発等、水産公害対策事業を総合的に実施することが大変重要です。したがって、例えば閉鎖性の強い松島湾については、その環境の浄化を図るため「松島湾リフレッシュ事業」の一環として海洋環境浄化再生事業を積極的に推進



養殖漁場風景

し、環境の再生を目指しております。これらの事業及び調査結果が、漁業者や行政面において広く活用されて真に生きた試験研究となり、本県沿岸水産業の振興に役立つことを念頭に置きながら仕事を進めています。

(養殖生物科)

これまでの魚貝類科と海藻科が一つとなって、メンバーも科長以下五名の精鋭で沿岸増殖業の安定と振興を目指して、日夜努力を続けています。主な仕事としては、ノリ、カキ、アサリなどの増殖の安定化のための調査試験、シロザケ、サクラマスなどサケ資源の増大のための生態調査、ホッケガキを始めとした新たな作目の増殖技術開発のための試験などがあります。

とりわけ、昨年は種ガキ採苗が不振に終わったことから、今年はその非でも成功させなくてはということで、学識経験者、種ガキ生



養殖カキ水中写真

産者代表等で構成する「カキ養殖安定化推進検討委員会」の意見、

助言に基づきながら、地元漁協・研究会との連携プレーの下、密な調査を行った結果、お陰様で成功裏に終漁を迎えることができました。今は、休む暇もなくノリの漁場



ノリ漁場調査

調査にかけ回っているところですが、静穏温暖な日和つづきで小春日和を憾みながら海の好転（荒天？）を祈るこの頃です。漁場で見かけたら是非声をかけ叱咤激励して下さい。これからよろしくお願ひします。

(生物工学科)

バイオテクノロジーなどの先端技術を用いた品種改良や種苗生産技術の開発・改良などを担当しています。対象生物は魚類、貝類、藻類と多岐にわたっています。

品種改良の分野では、周年出荷も可能となる三倍体マガキの研究や、選抜・交雑によるマガキの優良品種の作出、細胞融合によるノリの新品種作出などに取り組んでいます。

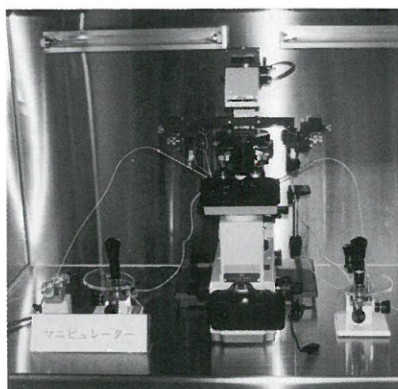
〈マガキの染色体〉



種苗生産技術分野では、二枚貝

幼生の餌となる微小藻類の大量培養法の開発や、トリガイ等高級二枚貝の自動給餌型幼生飼育法の開発など省力化に向けた技術の改良、及び河川溯上率が高いと予想される自県河川系アユの種苗生産技術の確立を目指しています。

これらの業務の遂行のため、細胞を操作するマイクロ・マニピュレーターや細胞融合装置、微小藻



マイクロ・マニピュレーター

類を短時間で計数するコールターカウンター、任意の水温の飼育用水をつくるアクアトロンなどの機器類が整備されていますので、これからも一層の研究開発に努めて参ります。

平成5年度宮城県水産研究開発センター主要業務

I 養殖・防疫分野

- | | | |
|------------------------|---|--|
| 1 沿岸養殖業安定化対策事業（県単） | ： | ノリ・ギンザケ・ホタテ等調査、通報、会議運営等。 |
| 2 かき養殖安定化推進試験（県単） | ： | カキ・種ガキ。親貝成熟度調査、浮遊幼生分布調査、精子受精卵放流試験、同推進検討委員会の運営。 |
| 3 二枚貝類種苗生産システム開発試験（県単） | ： | トリガイ等の省コスト・省力型の餌料培養、浮遊幼生飼育、陸上稚貝飼育システム開発。 |
| 4 魚類防疫対策事業（国補） | ： | 魚類防疫指導、水産用医薬品適正使用指導。 |

II 増殖・栽培漁業・資源管理分野

- | | | |
|----------------------------------|---|-------------------------------|
| 1 海藻群落の複合的利用及び造成管理システムに関する研究（県単） | ： | アラメ人工造林。 |
| 2 地域特産種量産放流技術開発事業（国補） | ： | ホッキガイ栽培事業の展開。 |
| 3 さけます生産効率向上調査事業（国補） | ： | 増殖事業の効率化、志津川以南。 |
| 4 さくらます資源増殖振興事業（国補） | ： | 志津川以南。 |
| 5 あゆ資源増大促進事業（県単） | ： | 種苗生産体系の確立、資源増大。 |
| 6 特定海域新魚類量産技術開発調査（国補） | ： | ニシン栽培事業の展開。 |
| 7 資源管理型漁業推進総合対策事業（国補） | ： | 広域回遊資源・ひらめ。 |
| 8 同（国補） | ： | 地域重要資源調査・浦戸あさり。 |
| 9 秋さけ資源利用配分適性化事業（国補） | ： | 親魚標識放流再捕による産卵回遊期の生態に関する情報収集。 |
| 10 資源管理型漁業推進対策事業（県単） | ： | 人工礁効果調査 雄勝人工礁・仙台湾海域礁魚礁漁場効果調査。 |

III 新技術・バイオテクノロジー分野

- | | | |
|--------------------------|---|-------------------------------------|
| 1 藻類バイオテクノロジー技術開発試験（県単） | ： | アマノリ等の高品質品種の細胞融合手法等による作出。 |
| 2 水産バイオテック導入基盤整備事業（資保協委） | ： | 3倍体マガキ作出(サイトカラシンB、カフェイン使用)及び特性評価試験。 |
| 3 新品種作出基礎技術開発事業（国委） | ： | マガキ地方品種の選抜・交雑による高品質マガキの作出。 |

IV 環境・赤潮・貝毒分野

- | | | |
|----------------------------|---|---|
| 1 漁場環境汚染監視調査事業（県単） | ： | ギンザケ養殖漁場の漁場環境監視及び漁場改善技術開発調査。志津川湾・女川湾。 |
| 2 漁場保全対策事業（国補） | ： | 生物モニタリング調査等の漁場環境の監視、漁業被害の未然防止・防除。 |
| 3 赤潮情報伝達事業（国補） | ： | 赤潮・貝毒情報の収集通報。 |
| 4 貝毒調査、有用貝類化監視対策事業 | ： | 下痢性・麻痺性、プランクトン、ホタテ・アカザラ・ムラサキイガイ・アサリ・カキ等の貝毒調査・監視・通報。 |
| 5 貝毒被害防止対策事業（国委） | ： | 毒化予知手法の開発。気仙沼水試共同。 |
| 6 温排水影響調査（国交付金） | ： | 女川原子力発電所温排水調査及び通報。 |
| 7 浅海漁場水質汚濁調査（県単） | ： | 松島湾・万石浦等（ノリ・カキ・アサリ漁場）調査及び通報。 |
| 8 仙台湾貧酸素水発生機構調査（県単） | ： | 観測及び発生機構調査。H63夏に発生。 |
| 9 大型植物バイオマスによる海域浄化と生産力向上試験 | ： | アマモ・アコモク・オゴノリ等による海域浄化及び生産物の有効利用化。松島湾リフレッシュ関連。 |
| 10 漁場改善技術開発試験（県単） | ： | かき殻利用技術開発・アサリ漁場の造成、カキ養殖漁場の底質改善。 |
| 11 貝殻散布調査（国委） | ： | かき殻利用技術開発・ギンザケ養殖漁場の底質改善。 |

V 漁海況調査・予報、資源調査分野

- | | | |
|------------------------|---|---------------------------------------|
| 1 漁海況予報事業（国補・県単） | ： | 資源の合理的利用と操業の安定化を図るため海洋・資源情報を調査・収集・提供。 |
| 2 水産生物生態調査（国委） | ： | まぐろ・かじき資源の変動機構の調査究明。 |
| 3 日本周辺くろまぐろ調査（国委） | ： | 北太平洋におけるマグロ資源管理のための資源動向調査。 |
| 4 200海里水域内漁業資源調査（国委） | ： | 沿岸沖合資源の調査・評価。 |
| 5 太平洋系マイワシ資源等緊急調査（国委） | ： | 太平洋系マイワシ資源動向の調査解析。 |
| 6 漁業構造再編資源回復対策調査事業（県単） | ： | 資源変動の調査解析、漁獲管理方式の策定。 |

VI 漁業後継者育成・水産業改良普及分野

- | | | |
|----------------------|---|-----------------------|
| 1 若い漁業者育成確保推進事業等（国補） | ： | 技術・資質の向上事業。 |
| 2 漁業後継者育成事業等（県単） | ： | 青年・婦人・漁業士グループをつうずる指導。 |

VII 教育研修分野

- | | | |
|--------------------|---|---------------------------------------|
| 1 自主企画研修講習会の開催（県単） | ： | 県水産関係試験研究機関連絡調整、新技術習得研修、海の教室、担い手育成研修。 |
| 2 広報事業（県単） | ： | 県水産関係試験研究成果発表会、広報資料作成提供。 |

調査船の主な運航経過 (平成5年4月~11月)

船名・新大東丸

期 間	用 務
4月12~15日	沿岸定線調査
4月27~28日	コウナゴ・オキアミ分布調査
5月10~13日	沿岸定線調査
5月15日	仙台湾標識ボンデン設置
5月17~20日	マイワシ北上期分布調査
5月24~28日	カツオ・マグロ漁場調査
5月31~6月3日	沿岸定線調査
6月6~10日	マイワシ北上期分布調査及び沖合定線調査
6月21~25日	イカ類漁場一斉調査
7月5~8日	沿岸定線調査
7月19~22日	仙台湾イカナゴ底曳調査
7月29~30日	少年水産教室 (漁労体験乗船)
8月3~6日	サンマ漁場一斉調査及び沖合定線調査
8月12~13日	沿岸定線調査
8月24~25日	タラ類底曳調査
8月31~9月3日	沿岸定線調査
9月20~22日	仙台湾イカナゴ夏眠期調査
9月28~30日	秋さけ標識放流調査
10月4~7日	沿岸定線調査
10月12~15日	サンマ漁場一斉調査及び沖合定線調査
10月19~22日	秋さけ標識放流調査
11月8~11日	沿岸定線調査
11月15~17日	秋さけ標識放流調査
11月24~26日	底魚資源調査

船名・開 洋

期 間	用 務
4月12~15日	浅海定線調査
4月26~27日	魚礁効果調査
5月10~13日	浅海定線調査
5月14日	女川湾底質調査
5月17~19日	石巻湾ニシン稚魚分布調査
5月24~26日	タラ類幼魚分布調査
5月31~6月3日	浅海定線調査
5月27日	仙台湾酸素量調査
6月23日	仙台湾酸素量調査
6月7~8日	タラ類幼魚分布調査
6月17~18日	魚礁効果調査
6月29~30日	マアノゴ漁場調査
7月5~8日	浅海定線調査
7月9日	女川湾流速計設置
7月12~13日	魚礁効果調査
7月23日	女川湾流速計撤去
7月19~20日	ヒラメ仔魚分布調査
7月22,28日	石巻湾種ガキ分布調査
8月9~10日	浅海定線調査
8月4,13,16日	石巻湾種ガキ分布調査
8月24日	仙台湾酸素量調査
8月20,25,30日	石巻湾種ガキ分布調査
8月31~9月3日	浅海定線調査
9月8日	石巻湾種ガキ分布調査
9月6~7日	魚礁効果調査
9月21日	仙台湾酸素量調査
9月28~29日	魚礁効果調査
10月4~7日	浅海定線調査
10月19~20日	魚礁効果調査
10月21,26日	温排水底質調査
10月25日	仙台湾酸素量調査
10月28日	標識ヒラメ放流調査
11月8~11日	浅海定線調査
11月15~16日	魚礁効果調査
11月18日	仙台湾酸素量調査

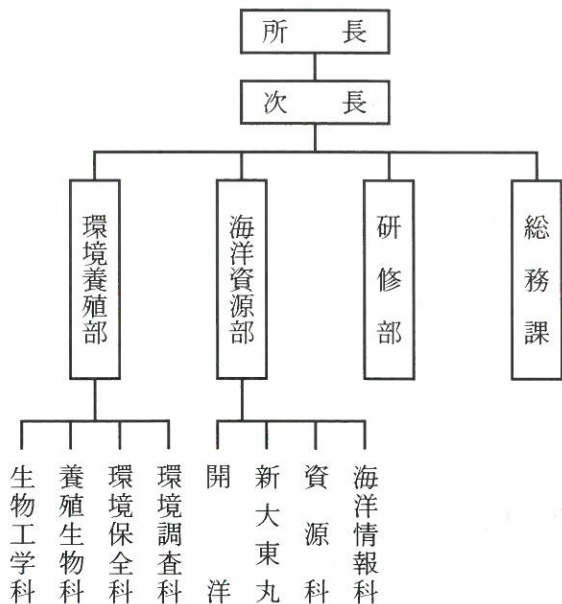
主 な 行 事

期 間	行 事 名
4月8日	記念植樹祭
6月11日	水産研究開発センター落成記念式典
6月24日	平成5年度水産関係試験研究機関研究成果発表会
7月9日	カキ養殖安定化推進検討委員会
7月19日	種ガキ研修会
7月28~30日	少年水産教室
8月11日	ノリ養殖問題研究協議会
8月13日	サンマ研修会
8月13日	貝毒に係る打合せ会議
8月16~20日	潜水講習会
8月20日	第2回水産関係試験研究機関研究成果発表会
9月6日	三倍体マガキ情報交換会
9月11日	海の教室 (親子体験学習)

主 な 視 察 及 び 研 修

月	取 材・そ の 他
4	/30 仙台放送「朝のメッセージ」録画撮り
5	/13 広報課取材 /14 仙台放送「朝のメッセージ」 /14 東北放送「みやぎ東西南北」録画撮り /21 知事との対談番組用(東日本放送)
8	/26 職員広報誌DO記事掲載取材(行政管理室)
月	研 修 者 等
4	/5 トリガイ養殖研修(京都府立海洋センター)
7	/5 中国吉林省農業庁副所長(王安貴)
8	/3~12 福島県小名浜水産高校(教員栽培関係研修) /5 雄勝町東部漁協ホタテ部会 /10 イタリアチビタベッキア市 /11 塩釜水事管内水産行政機関連絡協議会(講演)
9	/22 アドリアーノ氏(ブラジル)
10	/7 三倍体マガキ研修(保健所次長会) /21 同研修会(県内試験研究機関公所長会) /26 東京水産大学(資源育成学科学3年生)
11	/2 県内工業高校科学系職員 /10 中国吉林省

組 織



試験研究成果発表会

県内五つの水産研究機関主催で研究成果発表会が、平成五年六月二十四日に当センターの会議室で開催されました。

発表会には、県漁連・県漁業士会・県漁青連・県漁婦連・水産加工业界・市・町及び県行政機関から参加があり、出席者は百三十一

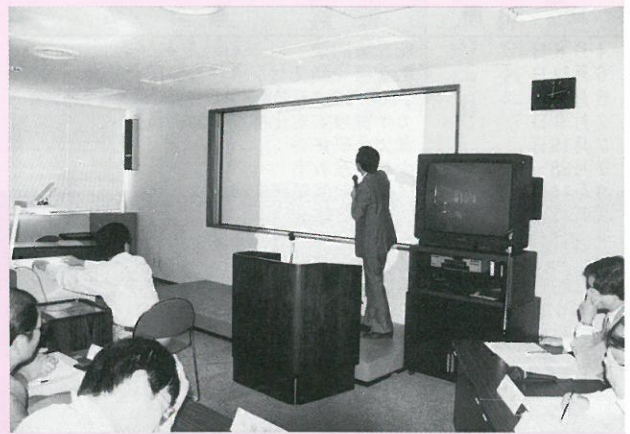


名でした。

発表会の内容は、「話題・情報提供」が四題、「利用・加工」が二題、「魚病・バイテク」が二題、「貝類・貝毒」が三題の計十三題と多岐にわたっていました。

参加者の感想・提案では、「水産の種々の研究・開発が産業に役立っていることを認識した」「研究機関の仕事の情報を早く知りたい」「フリーに話し合える時間の設定」等があり、次回からは技術的な工夫も行い発表会を進めていくとともに、この機会を通して各界とのコミュニケーションを図ってまいります。

また、当日参加できなかった方々から、研究成果発表会のうちから、「水産情報システムの紹介」「金華山海域の長期的変動が水産資源に及ぼす影響」、「アメリカオオカイカの利用加工に向けて」「養殖銀さけの水揚げ方法と鮮度変化について」の四課題について



て、強い要望があり、石巻魚市場及び水産加工研究所と当センターの共催で八月二十日、当センターの会議室で第二回が開催されました。

第二回の発表会には、石巻・女川地区の魚市場・水産加工業・漁協などの業界から八十三名の参加がありました。当日は、前回同様アメリカオオカイカの試食会とアンケート調査が行われ、同イカの利用加工に関して貴重な資料を得ることができました。

研究成果発表会プログラム

- | | | |
|---|---------|--|
| 1 | 話題・情報提供 | (1) イタリア・アドリア海におけるアサリの完全養殖について 酒井 敬一 (水研開セ・現漁政課) |
| | | (2) 水産情報システムの紹介 和泉 祐司 (水研開セ) |
| 2 | 栽培・資源 | (1) ニシン種苗生産における生残率向上試験 佐藤 金三 (栽培セ) |
| | | (2) ウニの種苗生産と中間育成技術開発試験 佐藤 公信 (栽培セ) |
| | | (3) 人工魚礁に生息するクロソイの季節移動と日周移動 富川 なす美 (気水試) |
| | | (4) 金華山海域の海況長期変動が水産資源に及ぼす影響 児玉 純一 (水研開セ) |
| 3 | 利用加工 | (1) アメリカオオカイカの利用加工に向けて 岩井 拓郎 (加工研) |
| | | (2) 養殖ギンザケの水揚げ方法と鮮度変化について 小林 徳光 (加工研) |
| 4 | 魚病・バイテク | (1) ギンザケのEIBS (アイブス: 赤血球封入体症候群) に対する免疫の獲得 高橋 清孝 (内水試) |
| | | (2) 全雌ギンザケの養殖特性と今後の養殖業への導入 佐伯 光広 (内水試) |
| 5 | 貝類・貝毒 | (1) 種ガキ採苗期における水温環境 小野寺 毅 (水研開セ) |
| | | (2) カニ類数種によるキタムラサキウニ捕食試験 白石 一成 (気水試) |
| | | (3) 気仙沼湾奥のDinophysis acuminataによる2枚貝の下痢性毒化事例について 田口 滋之 (気水試) |